

- 一 行動に制限があり、思うままにならぬ身分なので。
- 二 源氏の君はその聖の所までお登りになつて。
- 三 誰であるのか身分をおしらせにならないで。
- 四 一見して貴い身分の方とわかる様子なので。
- 五 先日お呼びのございましたお方でありましょいか。「めし」は名詞。
- 六 加持、祈禱などで効験(こうけん)をあらわす方面の行法も。
- 七 高德の僧。「かしこきおこなひ人」「聖」・「大徳」は同一人。
- 八 然るべく利きめのありそうな護符(ごふ)などを作って(源氏の君に)お飲ませ申しあげる。「すく」は「食べる・飲む」意の四段動詞。
- 九 「せ」は使役の助動詞、連用形。(源氏の君は聖の所から)少し外に出て、あちこちご覧になると。
- 一〇 寺院に付属する僧の住む宿舎。
- 一一 「たゞ」(真)は「下」と呼応して、「真下に」の意。「たゞ」以下「何人の住むにか」までを、会話文と見ることもできる。

たずまひも、をかしよう見ゆれば、かゝる歩きもならひ給はず、所狭き御身にて、めづらしうおぼされけり。寺のさまもいとあはれなり。峰高く、深き岩の中にぞ聖入りゐたりける。上り給ひて、誰ともしらせ給はず、いといたうやつれ給へれど、しるき御さまなれば、(聖)「あなかしこや。一日めし侍りしにやおはしますらん。今はこの世の事を思ひたまへねば、験方のおこなひも捨て忘れて侍るを、いかでかうおはしましつらむ」と驚きさわぎて、うち笑みつゝ見たてまつる。いとたうとき大徳なりけり。さるべきもの作りて、すかせたてまつり、加持などまゐるほど、日高くさしあがりぬ。

三 すこし立ち出でてつゝみわたしたまへば、高き所にて、こゝかしこ僧房どもあらはにみおろさる。たゞこのつゞらをりの下に、おなじ小柴なれ

- 一 紫の上の祖母の兄にあたる僧都。僧都は僧綱(そうこう)の一つ。僧正につぐ僧官位で、四位の殿上人に相当する位であり、僧正、僧都、律師の三段階があった。
- 二 寺と聞いておりますよ。「かた」は「寺・僧房」の意。
- 三 (こちらが)気恥かしくなる人が。「はづかし」は向いあつて、相手の身分が高かつたり、尊いためにこちらが恥かしく感ずる意。
- 四 僧都が私のきたことを聞きつけてもしたら。
- 五 雑用にあたる小間使いをする童女。
- 六 仏に供える水、梵語からきた語。
- 七 美しい女の子達や、若い女房や童女がみえます。

- 八 日が高くなるにつれて、周期的に出る熱が出るしなかと心配なさつてゐるのを。
- 九 気になさらないのがよろしうございます。

ど、うるはしうしわたして、きよげなる屋、廊など続けて、木立いとよしあるは、(源氏)「何人の住むにか」とゝひたまへば、御供なる人、「これなん、なにがし僧都の、この二年籠り侍るかたに侍りける」(源氏)「こゝろはづかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうも、あまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」など宣ふ。きよげなる童などあまた出でて、闕伽たてまつり、花をりなどするもあらはにみゆ。(供心)「かしこに女こそありけれ。僧都は、よもさやうには据ゑ給はじを、いかなる人ならん」と口々にいふ。おりてのぞくもあり。(供心)「をかしげなる女子ども、若き人、童女なむみゆる」といふ。

三 君はおこなひし給ひつゝ、日たくるまゝに、いかならんとおぼしたるを、(供心)「とかうまぎらはさせ給ひて、おぼし入れぬなむよく侍る」と聞き